

リレー連載 理事が語る コンピュータシステムネイティブが思う「情報システム」

文教大学 阿部 秀尚

このたび、理事を拝命いたしました文教大学の阿部 秀尚と申します。微力ながら、本学会の力となれるよう、努めてまいる所存です。どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

私がコンピュータシステムと出会ったのは、まだ記憶が定かではない幼少の頃でした。当時、祖父の営んでいた会計事務所には、紙テープをパンチする端末しかなく、母がパンチ済みの紙テープを携えて、在来線に1時間乗り、計算センターへ持参しては計算を依頼していました。私は、そこによく同行していたとのこと。おぼろげに記憶にあるのは、働く両親の横で紙テープのパンチくずできょうだいと遊んだことや、私が小学生に上がる頃、ようやく8インチのFD（フロッピーディスク）を搭載した計算機が導入され、紙テープからのデータ移行のために紙テープの交換を手伝ったこと、そして大量の紙出力と格闘する両親の姿を見ていたことです。こうした幼少期の原記憶から、私とコンピュータシステムとのかかわりが始まっています。今でいう「〇〇ネイティブ」という表現を使うと、コンピュータシステムネイティブ、といったところでしょうか。

時が経ち、私が大学で学んだのは、静岡大学情報学部でした。国立大学として最初の「情報学部」ということで、人とかかわりを重視した“文工融合”の情報学を標榜し、先生方も新しい情報学と言う分野を拓くため、議論を重ねられていました。当時は、同学部の一期生として、“文工融合”の情報学の誕生に出会い、“文工融合”の情報学ネイティブ”ともいえる体験を得ることができました。所属学科は、工学系でしたので、コンピュータやネットワーク、それらによるシステムがどのように作られ、どう動くか、どう動かしていくか、ソフトウェアもハードウェアもどう効率よく作るか、といった方向で学びつつ、カリキュラムにあった「人間」側に焦点を当てた科目（主に認知心理学に関わる科目）を修得しました。

その後、就職した職場では、病院情報システム及び大学内の教育研究情報システムの運営に関わるため、毎週のシステムベンダーとのミーティングに参加しました。マルチベンダー環境で人とかかわりの深いシステムがどのように運営され、日々の問題や要望が解決されていくのか、その管理をどのように行っているのか、といった、大学教員として、教育と研究だけを行っている中では得難い、貴重な経験をさせていただきました。人の命に係わるシステムであっても、そのトラブルを人の生死に絶対に直結させてはならない、万が一のシステムの停止があっても業務を止まない、それでいて、日常の業務には不可欠な

存在であるという、システム運用の実際の姿を学ぶことができました。

現在の文教大学情報学部情報システム学科に着任したのは、2012年のことです。文教大学情報学部は、日本で最初の情報学部であり、“文理融合”の情報学を掲げています。ここに至り、ようやく、自らを「情報学ネイティブ」と称することができるのではないのか、と自身の中では思っています。現職の情報システム学科は、1986年創設であり、当時としては珍しく“コンピュータシステム”や“ネットワークシステム”ではなく、“情報システム”を学科名に掲げ、現在に至るまで同一の名称です。学科創設以来、本学会に関わる多くの先生方が築いてこられたプロジェクト型学習を基盤とするカリキュラムが整えられています。このような学科で、教員の役割は、いかに“人とのかかわりを考えた業務システムやコンテンツを制作できる人材を育成するか”であり、コンピュータやネットワークを組み合わせたシステムを作る方法はもちろん、常に人の行う業務を意識したシステム作り、情報システムの開発を身に付けてもらうことに注力しています。

昨今、デジタルネイティブ世代と言われる学生が世に出る時代となっていますが、自称コンピュータシステムや情報学のネイティブとしての私から見ると、物足りないのは“人間とアプリやコンテンツのかかわり”への興味の希薄さです。高校の教育現場では教科「情報」が必修化され、20年以上が経過していますが、未だに「情報」という言葉は「コンピュータ」と意識され、画面から計算機の中の方を向いた人の育成が「情報学」の教育と受け止められ、その考え方が再生産され続けているのが日本国内の現状のように感じます。

このような現状から、「人間中心の情報システム学」の普及はまだまだ途上であり、人とのかかわりを重視し、画面の中から使う人を見ることができる技術者やコンテンツ制作者がより多く必要です。「人間中心の情報システム」ネイティブを増やしていく——そのためには情報システム学会の諸活動が必要不可欠であると日々痛感しながら、職務に邁進してまいりたいと考えております。